

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	大西洋史
2. 審査委員	主査：（兵庫教育大学教授） 初田隆 副主査：（岡山大学教授） 泉谷淑夫 委員：（兵庫教育大学教授） 新山眞弓 委員：（上越教育大学教授） 松本健義 委員：（兵庫教育大学准教授） 前芝武史
3. 論文題目	図画工作科の授業における教師のパフォーマンスについて
4. 審査結果の要旨	<p>教科教育実践学専攻芸術系教育連合講座 大西洋史から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき下記の通り審査を行った。</p> <p>論文審査日時：平成29年2月11日（土）15時10分～15時35分 場所：兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 第4講義室</p> <p>1. 学位論文の構成と概要 学位論文の構成は以下のとおりである。</p> <p>序章</p> <p>第1章 教師のパフォーマンスの定義</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教員の意識調査 2. 学習者の意識調査 3. 図画工作科の授業で必要とされる「教師のパフォーマンス」とは <p>第2章 授業における教師のパフォーマンス</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業比較の実施 2. 結果の分析 <p>第3章 教師のパフォーマンスの特性</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 調査について 2. 実践Aについて 3. 実践Bについて 4. 実践A・Bの考察 5. 授業省察での有効性 <p>第4章 教師のパフォーマンスの詳細</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 事例の記述方法について 2. 事例の考察

3. トランスクリプトの比較から

第5章 自己省察に効果的な授業評価システムの開発

1. 分析方法について

2. 調査について

3. 調査の結果

終章 本研究の成果と今後の課題

本論文の概要は次のとおりである。

本研究の目的は、アンケートの分析や授業観察から図画工作科の授業における「教師のパフォーマンス」の構成要素や構造、特性などを明らかにしたうえで、「教師のパフォーマンス」の傾向や水準を把握するための方法を確立するとともに、パフォーマンスの向上をサポートするための自己省察システムを開発することである。

序章では、「パフォーマンス」という用語の整理を行い、佐藤綾子やマーク・L・ナップ、レイ・L・バードウィステル、マジョリー・F・バーガスなどの研究成果をまとめるとともに、山下や大泉による教師の発話研究との違いを確認している。

第1章では、小学校の教員および児童が、図画工作科の授業における「教師のパフォーマンス」をどのように捉えているのか、意識調査を行い分析・考察している。分析に当たっては「テキストマイニング」という統計手法が用いられている。分析結果から「教師のパフォーマンス」の構成要素として次の8項目を導出し、2章以降に取り上げられる事例は、この構成要素を観点にして分析考察されている。

- ①言葉の使い方（わざ言語などの特徴的な言い回しを含める）
- ②周辺言語（声の大きさ、高低、話す速さなど、音声に関するものすべて）
- ③表情
- ④身振り
- ⑤間（タイミング）
- ⑥間（空間）
- ⑦示範（技法・技術）
- ⑧示範（材料・用具）

第2章では、経験年数の異なる図画工作専科教員が行った同一題材の授業の、導入場面におけるパフォーマンスを、評価シートやレーダーチャートに表し、パフォーマンスの使い方の違いや学習効果について比較検討している。主に、張子技法の説明に用いられたパフォーマンスが、その後の児童の活動に影響を与えていることが確認された。

第3章では、2人の学級担任が行った図画工作科と他教科の授業の「導入」、「展開」、「まとめ」の各場面における「教師のパフォーマンス」の特性を、評価シートやレーダーチャートに記録し、教科間・教師間の比較分析を行っている。国語や算数に比べ、図画工作科では用いられるパフォーマンスの種類や量が導入部分に偏在していることや、示範を中心に周辺言語や身振りなどが効果的に使われていること、などが確認されている。また、評価シートやレーダーチャートを用いた授業評価の方法が、教師の自己省察をサポートするうえで有効である可能性が示唆された。

第4章では、第3章で取り上げた授業の過程で特に優れたパフォーマンスが見られた場面を「トランスクリプト」で記述し、「教師のパフォーマンス」の有効性を確認するとともに、授業者に対して聞き取り調査を行い、これまでに述べてきた分析方法が、自己省察を行う上で有効であることの検証を試みている。

第5章では、調査を行った年に採用された初任教員Cの4月から7月までの計4回にわたる図画工作科の授業を、パフォーマンスを窓口に評価している。その内1回は、他2名の教員が行った同一題材の授業とCの授業との違いについて比較考察している。Cと他2名の教員との授業比較（分析Ⅰ）、導入・展開場面での3名の「トランスクリプト」の比較（分析Ⅱ）、Cが実施した4回の授業の比較（分析Ⅲ）、Cの1回目と4回目の授業の「トランスクリプト」による比較（分析Ⅳ）の4つの分析を試みている。Ⅰ～Ⅳの分析結果はパフォーマンススコアの比較グラフやレーダーチャート、「トランスクリプト」などに表すことで、相違点を捉えやすくし、初任教員Cのパフォーマンスの向上を明確に示すことができた。そのことによって、「教師のパフォーマンス」の向上をサポートするための自己省察システムの効果を確認している。

今後の課題としては以下の3点をあげている。

- ①今回作成した「評価システム」を教員研修に活用し、効果の検証を行うこと。
- ②調査対象を広げ、優れたパフォーマンスを可能とする要因を探り、それらを取り入れたパフォーマンスモデルを想定すること。続いてパフォーマンスモデルへの達成度合いを示す指標を定めること。
- ③上記モデルを基に、パフォーマンスの向上を図るためのトレーニングシステムをつくり教員研修への活用を検討すること。

2. 審査経過

(1) 獨創性

教師の指導法研究において、発話による分析は広く行われているが、周辺言語（声の大きさ、高低、話す速さなど）や表情、身振りなどのパフォーマンスに着目した研究は少ない。とりわけ、図画工作科では造形素材や表現技術、テーマ・題材などに関する研究が重視され、教師のパフォーマンスの効果に関してはさほど意識されておらず、近年のマニュアル的指導においては無駄なく結果を出すための「指示」についての実践研究が盛んに行われている。そこで、子どもの主体的な活動を引き出すための、実技教科ならではのパフォーマンスの在り方を示すことには意義があり、本研究の獨創的な点といえる。

(2) 發展性

優れたパフォーマンスは「ベテラン教師の技」などと呼ばれ、個々の教員固有の指導技術と見做されてきたが、これらを記録、分析することで、指導技術の共有化を図ることができる。さらには、本研究で示したパフォーマンスの分析手法を用いた自己省察システム及び次の課題としているパフォーマンスのトレーニングシステムを、教員研修や教員養成大学での授業に取り入れることで、教師や大学生のパフォーマンスの向上をサポートすることができる。

(3) 学校教育の実践への貢献

本研究で示した効果的なパフォーマンスの在り方や、自らのパフォーマンスを振り返るための自己省察システムは、教師の授業力の向上を図るうえで有効であり、個々の教員の授業実践における活用や、校内・市町村の実施する教員研修などでの活用が期待できる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は、大西洋史の提出した学位論文が博士（学校教育学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。